

1. 高所登山の実践と今後の課題

ダウラギリ I 峰 登頂

小野寺 斉

1. はじめに

1950年カリ・ガンダキの谷を訪れたフランス隊はダウラギリとアンナプルナを偵察した。彼らはダウラギリ I 峰の南東稜と東氷河をあきらめ、そしてフレンチパスに立ったリオネル・トレイとジャック・ウドーも短期間に登路を見出し得ずダウラギリ I 峰を断念、結局フランス隊はアンナプルナ I 峰に挑戦、見事に人類初の8000m峰登頂という栄誉を得たことは周知の事実である。さらにダウラギリ I 峰については深田久弥氏はその著「ヒマラヤの高峰」（白水社版1975年発行）の中で次の様に述べている。

「ヒマラヤ8000m峰14座のうち、全く未知のルートを求めてただ1回の攻撃で登頂を見たのは、アンナプルナとガッシャブルム II だけで、他はいずれもその前に偵察や試登があった。殊に手数のかかったのはエヴェレストとダウラギリで、エヴェレストは11回目、ダウラギリは8回目で、ようやくその頂上を陥された」と。

1960年春、スイス隊が執念でもって北東稜から初登頂、8人が頂上に立った。その後登山禁止期間を含めて30余年が経過、北東稜だけとってみても10隊以上が登頂に成功している。（そのほとんどは1980年代である。）その中には単独、アルパインスタイルや冬期登頂などが含まれており、この北東稜は今やダウラギリ I 峰のノーマルルートになっている。我々もこのルートを採用、幸いにも2名の登頂者を出すことが出来た。

本誌においては既に、冬期サガルマータ南西壁、チョモランマ東北東稜あるいはナムチャバルワ成功と言ったいわゆるバリエーションや未踏峰攻略の記事が並び、記録的にはとても我々の出る幕ではない。ただ敢えて言わせていただけるなら、名もない、町の一山岳会が力を合わせて何とか登ってきたということで、角度を変えてお読み頂ければと思います。

2. 何故ダウラギリ I 峰か

ダウラギリ I 峰南柱状岩稜（サウスピラークを登るべく東京都岳連隊が結成され、1975年春にアタックを開始した。そのメンバーには当会の井村哲（当時23才、4年会員）が参加しており、将来の会のヒマラヤ行の推進役となるはずだった。しかしその年の3月就寝中に雪崩で他隊員、ジェルパと共に遭難死してしまった。私はその悲報を松本で聞いた。3月下旬の黒部奥鐘山から唐松岳まで縦走、下山報告を東京にした時だった。まだ新人だった。国内であれ程強かった人間が何故と先輩達は考え、結局高所活動の不慣れという結論に達した。その後会でヒマラヤに行こう、ダウラギリに行こうという気運が高まり、翌年（1976年）のマッキンレーから少しずつ高度を上げた遠征を試み、今回

1. 高所登山の実践と今後の課題

へと到った訳である。本来は1988年（会創立50周年記念山行）を目標にしていたが種々の事情でその年はブロードピークに変更、ダウラギリはその3年後に持ち越された。計画書の前文を添付資料とします。（資料-1参照）

3. 計画段階

「ダウラギリI峰に行きたい人はいませんか」と言ったかどうか覚えていないが、毎週の集会や年1回の会員総会で参加者を募ったところ最初は14人の希望者があった。その後徐々に減っていき出発半年前には9人となった。以後この人数が固定となるが、この様に行きたい者は誰でもメンバーにした。その反面ヒマラヤ経験者の数があつという間に減り、9人のうち経験者は私ともう1名ということになった。年令的には21才から42才まで20才台、30才台、40才台とほぼ平均に分散した。30才台は女性2名であり、結果的にみて20才台中～後半が全体が一番強かった。

話し合いは10ヶ月前から月1回、日曜日に私の家で行った。前述の様にして集めたメンバーであり、高所の問題、登山技術の問題から遠征ノウハウまでと話すことはかなりあった。また筑波大学の浅野先生にお願いして低圧実験室を借り数回にわたり多くの隊員が低圧タンクに入り、“高所”を経験した。色々な意味でかなり効果があったように思う。また訓練山行と組合せて行くと倍以上の効果があるのではないかと思う。

ドクターについては、ほぼ決まりかけていたが途中でキャンセルされ、また捜し回るということになった。9人のメンバーでドクターなしでは心もとなく思い、あちこちと当たったが出発までの期間も短くついにあきらめざるを得なかった。

シェルパ雇用について、当初は「シェルパなしにしたい、それでダメなら途中で潔く引き返しましょう」という剛の者もいたが、結局2名雇うことになった。

入山時期については10月上旬の登頂を目指すなら余裕をみて8月下旬BC設営という考えもあったがモンスーン時期との兼ね合いもあり9月上旬BC着の考えで進めた。他隊の多くもこの時期のようである。

その他梱包、輸送の複雑な問題についても業者の助けを借りながら順調に進んだ。日本から出す隊荷の総重量は共同／個人装備、食料を含めて約800kgであった。余分なものもあり、もっと減らせるのではないかと思う。

4. カトマンドゥにて

8月下旬、2隊に分かれて到着した。先発隊は既に準備をかなり進めており、翌日にでも出発出来る状態であった。

通信機器についてはネパールは結構うるさく、トランシーバ（145MHz）持込は輸入手続を行った。このため一時空港預けとなり引出すのに1週間も費やした。

隊員達は準備も済み早くカトマンドゥを離れたがっており、結局隊長の私が1人残り、観光省の手

1. 高所登山の実践と今後の課題

続やトランシーバ等各種の処理を行った。

観光省には日山協の書類は全て届いていた。しかし途中で隊長が変更になったため、これらの日山協経由の変更届け以外に、前の隊長からの証明書が必要だと言われ（知らなかった）急ぎょ、東京に連絡し証明書をFAXで送付してもらい事なきを得たという思わぬハプニングがあった。

5. カトマンドゥからマルファへ

隊員達は8月24日にカトマンドゥを出発しポカラからキャラバンでマルファに到着した。（9月1日）（資料-2 キャラバンルート図参照）

私は彼らより6日遅れてリエゾンオフィサーとメイルランナーと一緒に出発、ポカラからはジョムソンまで航空機便を利用し、8月31日の昼にはマルファに着いていた。

キャラバン隊はポカラを出発してから8日目にマルファに着いたが、連日の雨で目的の山は全然見えなかったようだ。恒例のポーター達の抗議行動はその対応をシェルパに任せ若干の資金上昇にはなったが、さして大きな問題にはならずにすんだ。

マルファは1900年頃には僧侶河口慧海が通り、また近年では川喜田二郎氏による上水道の工事そして近藤氏の果樹園栽培など日本人には縁のある土地柄である。

ポカラからマルファまでは以下の行程でキャラバンした。

8月24日；ポカラ着、25日；ポカラ→ナウダングダ、26日；ナウダングダ→ビレタンチ、27日；ビレタンチ→キケドンガ、28日；キケドンガ→ゴラパニ、29日；ゴラパニ→タトパニ、30日；タトパニ→ガーサ、31日ガーサ→カラパニ、9月1日；カラパニ→マルファ

6. マルファからBCへ

1日の休養を取り9月3日マルファを出発した。砂ぼこりの上がる道をダンキーやポーター達（多くはマルファで新たに雇用）と一緒に進む。最初の幕营地ヤクカルカに着いた時には小雨模様で風が結構冷たかった。そこに2泊し次のカラパニに向かう。高度差約800mでこの辺りから頭痛、吐気をもよおしてくる。高山病の最初の洗礼だ。このカラパニ（黒い水という意味らしい）では一応水が取れ、次の地点までも遠いので、狭い場所をがまんしてテントを張るが日当たりが悪くシェルパ達は嫌がる。次のヒドンバレー（4900m）は水が取れる上に前者と条件が逆となるので、彼らの評判はよい。しかし我々が最初に行った場合、タトパス（5100m）を越えて行かなければならず非常に苦しい。タトパス上からは1960年にスイス隊が使用した飛行機イエティ号の残骸がそのまま残っているのを見ることが出来る。ヒドンバレーのテント場から谷の上流に向かって歩き、右岸を登るとフレンチパス（5300m）に着く。ここからは晴れていると北東稜上部をはっきりと見渡すことが出来る。（資料-3 登攀ルート図及び写真-1参照）フレンチパスからBC（4700m）までは急な道を下る。途中ダンキーは通れず荷を置いて引返すこととなる。

このBCまでの道は9月上旬にはまだ夏の名残があったが、帰路の10月中旬には小雪が降り、下旬に

1. 高所登山の実践と今後の課題

下からみた時はすっかり雪景色となっていた。

行程は以下の通りである。

9月3日；マルファ（2670m）→ヤクカルカ（4000m，2泊），5日；ヤクカルカ→カラパニ（4800m，2泊），7日；カラパニ→タトパス（5100m）→ヒドンバレー（4900m），8日；ヒドンバレー→フレンチパス（5300m）→BC（4700m）

資料-1 計画書前文

I 山名 ダウラギリ I 峰（8167m）

登山実施年 1991年 ポストモンスーン期

派遣団体名 昭和山岳会

II 登山するに至った経緯

昭和山岳会は昭和13年に創立されました。以来、会の目標『より高く、より困難を』を旗印に、積極的に登山活動を続けてまいりました。

戦前の谷川岳の岩場の開拓から始まり、南アルプスの沢、利尻岳の岩場、積雪期の鹿島槍ヶ岳、四季を通じての槍・穂高、さらには昭和48年頃より活発化した黒部川流域の山々の研究等々は、その時点での会員の持てる力を最大限に発揮した登山であったと言えます。

さらに、海外登山の軌跡として

昭和36・37年	ジュガル・ヒマール ビッグホワイトピーク登頂
46年	カフカズ
50年	ダウラギリ I 峰（遭難死）
51年	アラスカ マッキンレー登頂
52年	ハラモシュ偵察 ヨーロッパアルプス
53年	ハラモシュ登頂（会創立40周年記）
54・55年	ヨーロッパアルプス
58年	パキスタン ドバニ峰登頂
59年	中国 アムネマチン II 峰登頂
60年	ヨセミテ
61年	中国 チャンツェ峰登頂，アラスカ ハンター等
63年	ブロードピーク登頂（会創立50周年記念）
平成元年	ヨセミテ
2年	マカルー，ヨセミテ

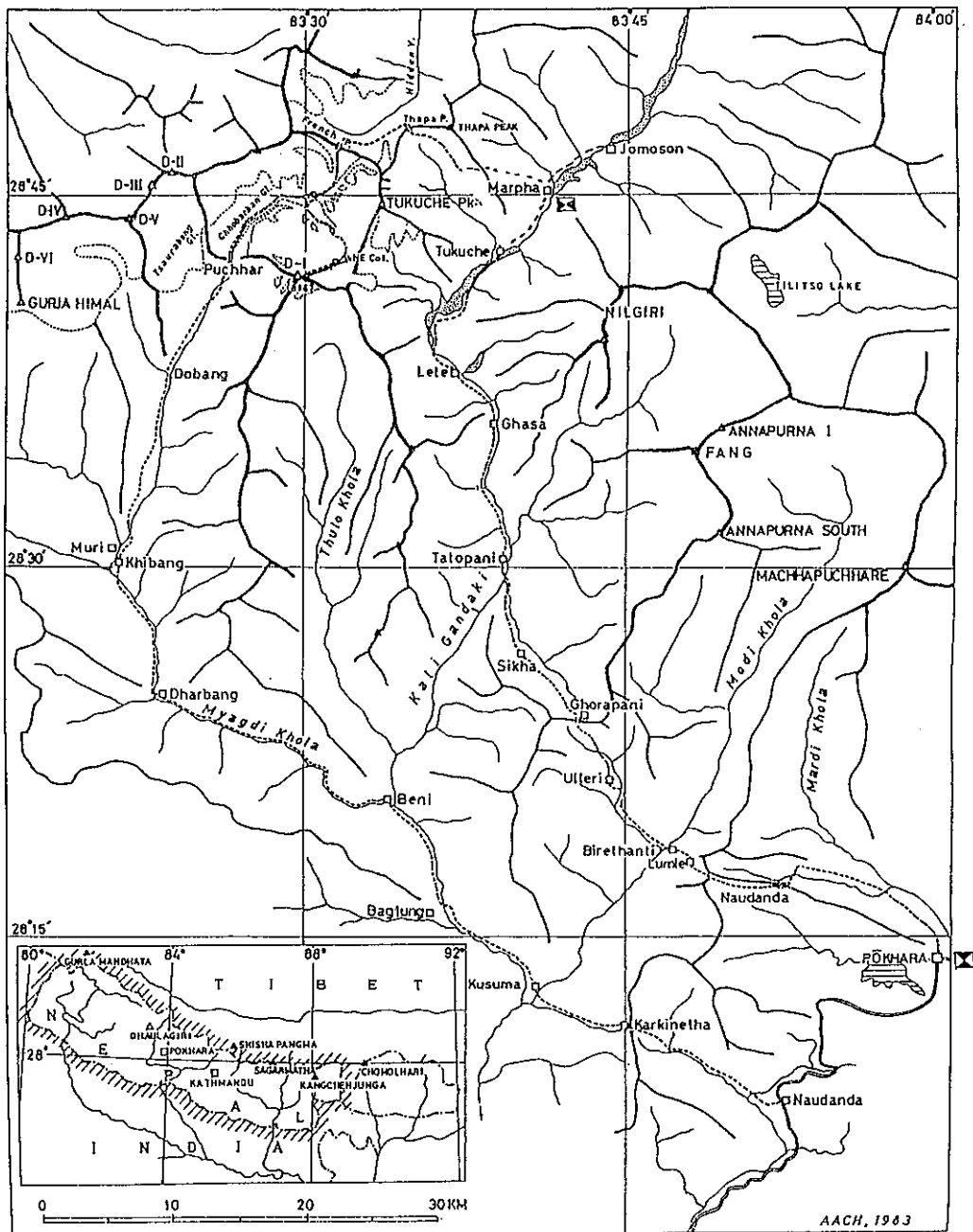
と、近年に至っては毎年のごとく海外へ遠征しております。今回は以上の経緯を踏まえ、ネパールヒマラヤの8000m峰へできるだけ多くの隊員を登頂させることを目標に隊を結成致しました。また、昭

1. 高所登山の実践と今後の課題

和50年に同峰にて遭難死した故・井村哲の追悼山行も兼ねております。

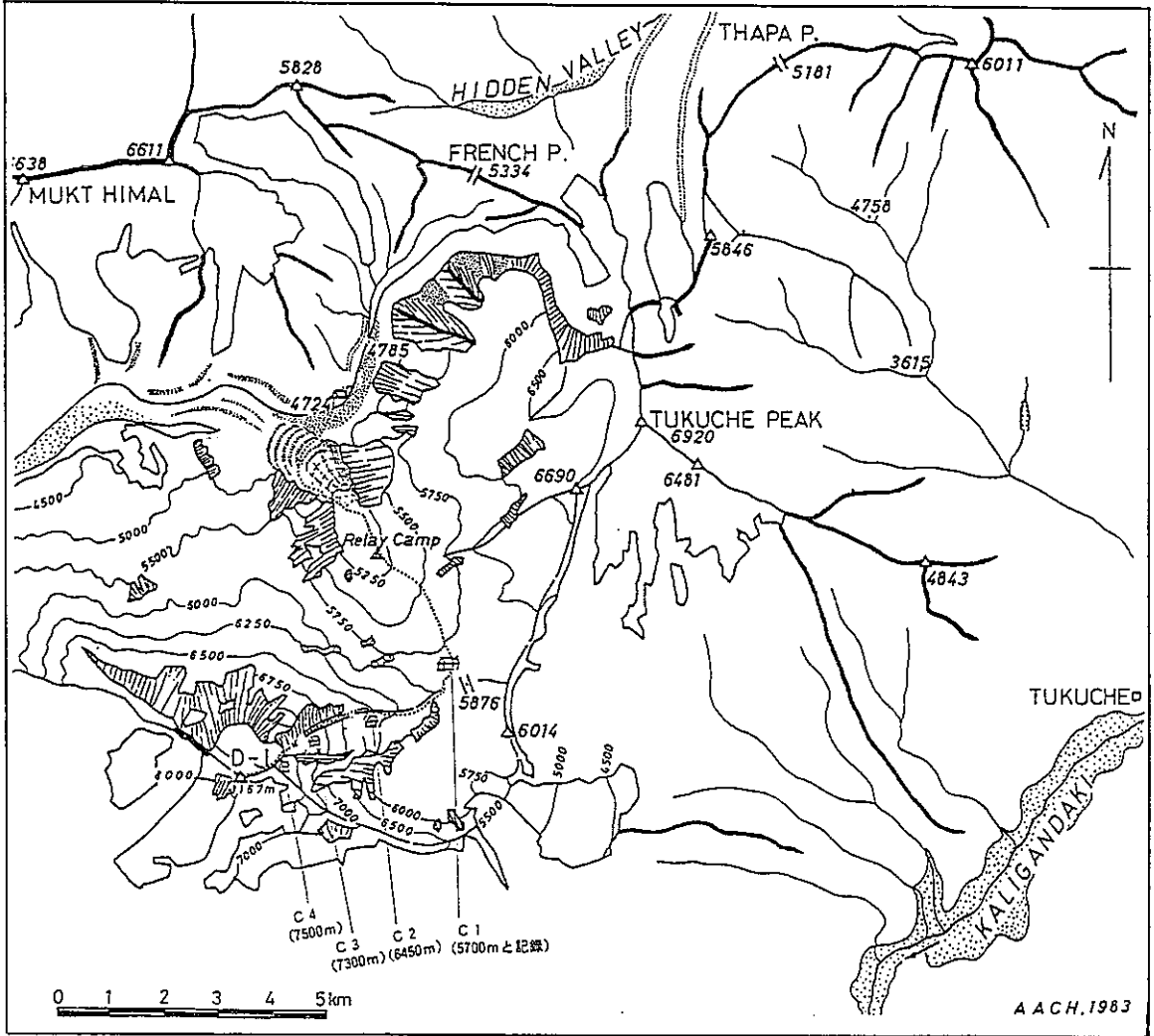
『より安全に、より多くの会員を8000m峰の頂上に』を目的にした単一山岳会で構成された隊ですので、計画が予定通り進行しますよう関係各位のご理解とご支援を賜わりたくよろしくお願い申し上げます次第です。

資料-2 キャラバンルート図



1. 高所登山の実践と今後の課題

資料-3 登攀ルート図



7. 登山活動

9月8日にBC着後12日にBC開きを行った。個人的なことで恐縮だが私は日本を出発する数ヶ月前から去る理由で体調を崩しており、現場の指揮はまともに出来なかった。代わって登攀リーダーの市川に権限の多くを委譲した。

さてBCにおいては既にスペイン隊のベースが張っており、C2までルートを延ばしていた。ただ彼らはその少し前に事故を起こしておりマヤンディコーラ側からのヘリコプターを待ち切れず2名がマルファに降りている。

1. 高所登山の実践と今後の課題

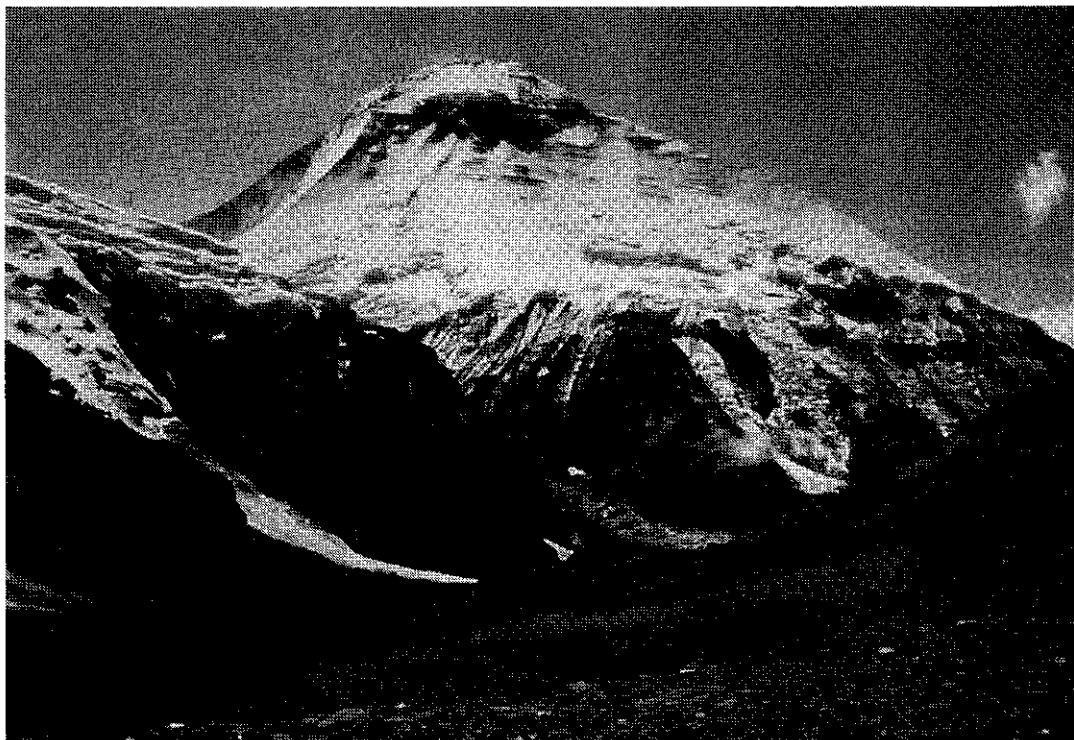


写真-1 フレンチパスからのダウラギリI峰

登山活動は13日から開始したが天気は一向によくならず、またアイスフォールは崩壊が激しく危険な状態出会った。実は今年のモンスーンは後半になって雨が降ったものの前半はカラカラの状態だったという。元々アイスフォール帯のことしか考えていなかったが、やむを得ずアイガー岩壁の下部にルートを開くことにした。そのため岩登り用の道具をかなり多く使ってしまい、最終的に足りなくなるのではと思い途中でメールランナーにメモを渡し、カトマンドゥまで買いに行かせた程である。

(結果的には足りた)ただ岩壁下部であるため落石には十分注意し、通過は朝早い時間ということにした。無理にアイスフォールにこだわらず、荷上げの苦勞も考えるとより安全な選択であった。荷上げも当然隊員が行うのであるが隊員による荷上げ量の体力的な個人差はこの頃から既に表れ始めていた。しかし全員登頂がたてまえであり、隊員に差はつけなかった。

この頃にはフランスから2隊がマヤンディコーラから入ってきた。

モンスーンが明けたというニュースが入ってきた。9月18日だった。確かにこの頃から天候もよくなりだした。ルート工作も順調に進み下部アイスフォール帯を抜け出した雪田にRC(リレーキャンプ5100m)を設ける。9月20日である。RCが出来たことにより、また天候の回復により隊員の志気は大いに弾みがつき9月22日にC1(5700m)、9月29日にC2(6450m)を設営した。この時期に荷上げ工作が大部はかどり、アタック態勢の重要な蓄積になったのだと思われる。BCからC1までの荷上げ

1. 高所登山の実践と今後の課題

により北東稜上にABCが出来た訳である。(写真-2 C1より上部をのぞむ) 隊員の体調もこの時期が揃って一番よかったのではないかと思われる。10月2日にはスペイン隊が登頂、風もなくまさに登頂日和であった。すでに2週間も続いている好天である。これが何日まで続くだろうかという不安が出てきても不思議ではない。加えてC2を建設したものの隊員全部が元気でC2までとは行かなくなってきた。C2からC3予定地までは高度差はC1-C2間と変わらないものの傾斜がきつくなり、7000mを越す位置にある。風も強くなり少し急がなくてはならない。10月7日にシェルパ2名と中島、横山はC3を設営した。予定地点は7100mであったが場所がなくやむなく7300mまで登り、テントを設営、再びC2に戻った。

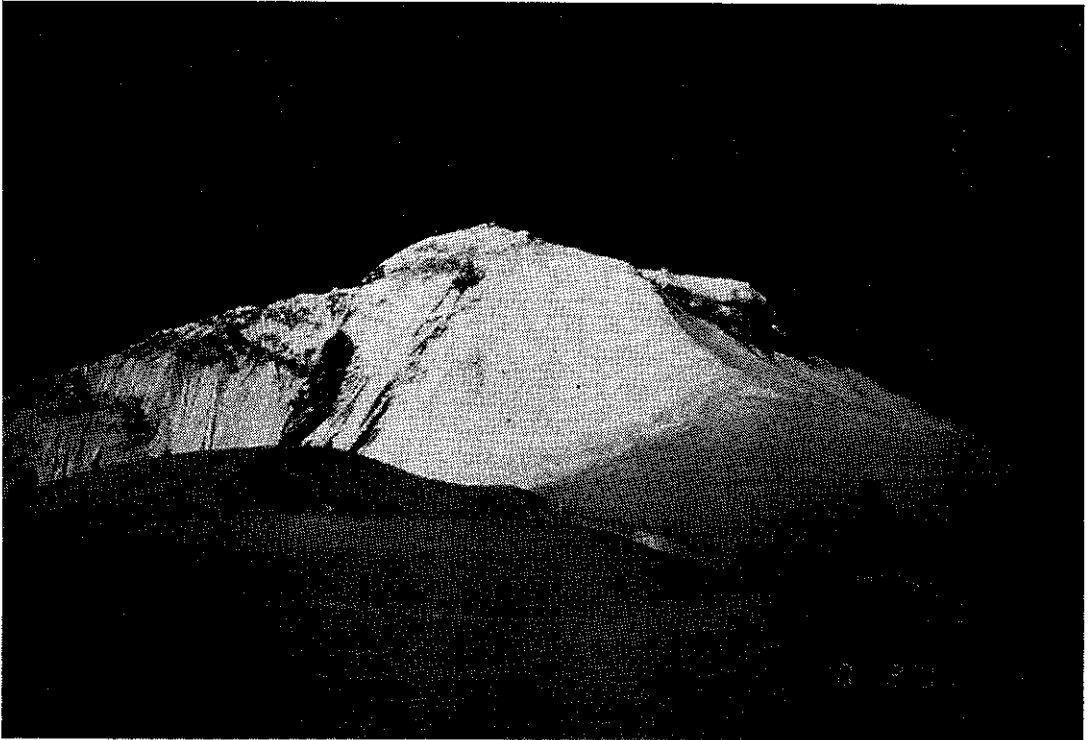


写真-2 C1からのダウラギリI峰

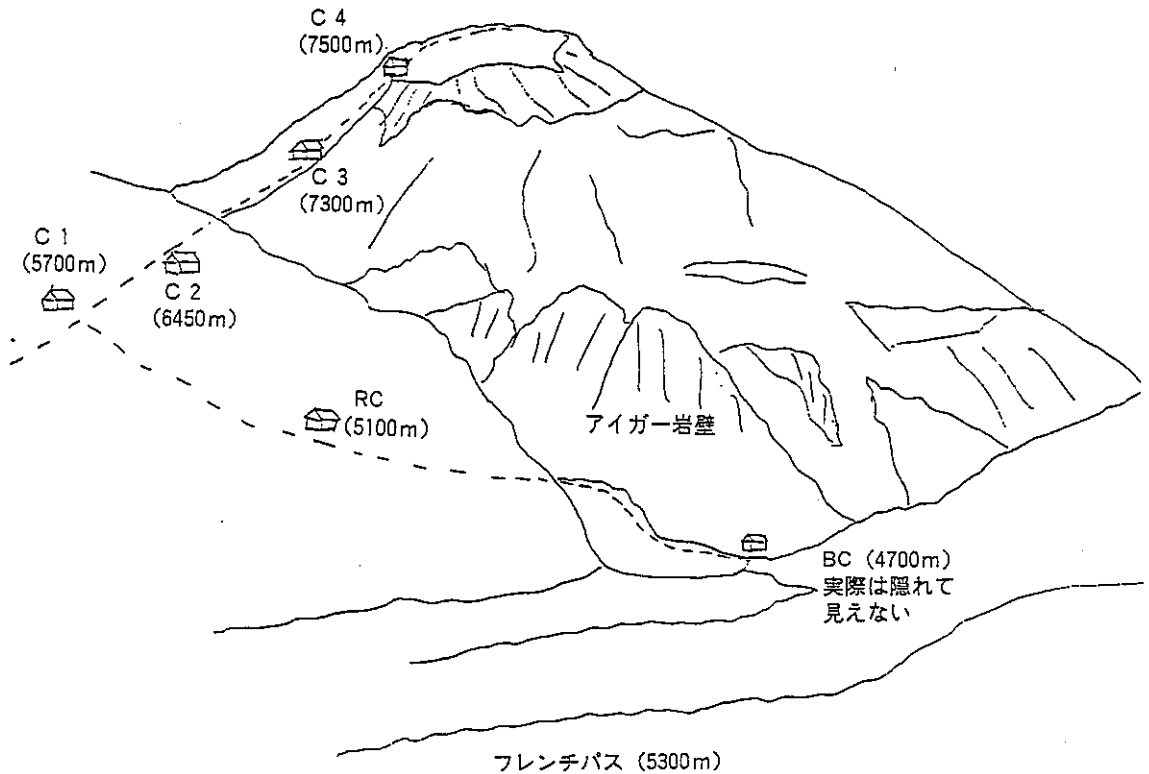
気温が下がり、降雪も多いらしい。トランシーバから聞こえてくる中島の声は大部登頂をあせている。BCにも霜が降り渡り鳥も観測されるようになってきた。1日休養の後、彼らは再びC3に向かい、翌10日にはC4を設営しそのまま泊まった。明けて11日午前3時、中島、横山そしてシェルパ1名はC4から頂上に向けて出発した。その時の様子を中島は次の様に記している。「昨日見た様子では右の雪壁を登る方が容易に思われたが、暗くてルートがよくわからない。そこで左の岩稜を忠実にたどることにした。

アンナプルナの向こうから朝日が昇ってくるころから風が強くなった。しかし、標高が上がるにつ

1. 高所登山の実践と今後の課題

れ、少し動くと息が切れ、呼吸困難になり、休む回数も増える。そのたびに『もう時間がない、あきらめて引き返そう』と思いながらも、午後2時、ついに頂上に立った。」と。登頂した3名はその日はC4に泊り、2日後BCに戻った。彼らの登頂から約1週間他隊員も2次登頂を試みたがC3に2名登ったのみで10月18日BCに集結した。

BCから頂上に到るまでのルートは前述の写真を基に作成した資料（資料4ーフレンチパスからみたルート）を御覧頂きたい。また登頂隊員の行動表も資料5に示してある。



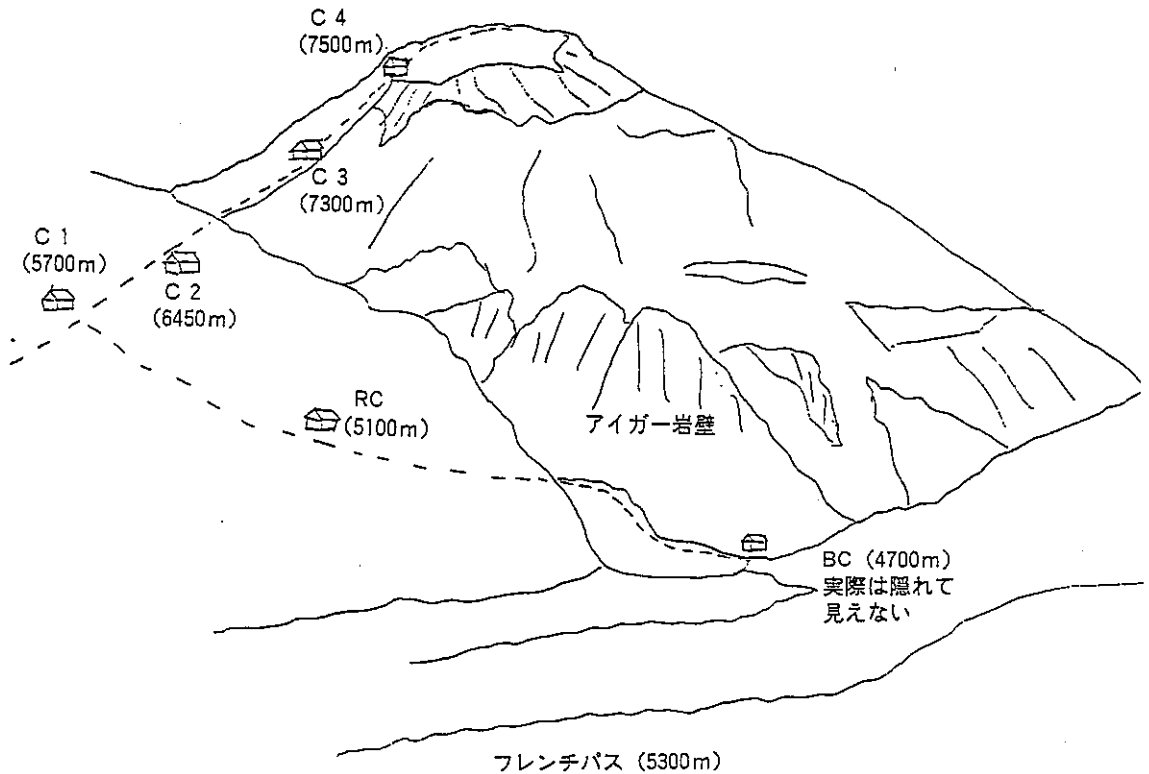
資料-4 フレンチパスから見た登山ルート

この表をみてもわかる様に上部に出てから比較的短い期間のうちに頂上に達している。本来ならばC3からは一度BCへ戻り休養し、それから再度上部へというのがパターンであろう。初心者の我々ならなおさらのことである。しかし天候の都合などでセオリー通りにはいかなかった。たまたま（かどうか判らないけれど）登れたので万々歳であったが、もし事故でも起きていればあるいは非難の対象となったであろう。しかし、また逆の見方としてこの位の高所順応性、体力、気力がこれからの高所登山には要求されるかもしれない。事実この2名は他の隊員より、高所順応性、スピードにおいて相

1. 高所登山の実践と今後の課題

れ、少し動くと息が切れ、呼吸困難になり、休む回数も増える。そのたびに『もう時間がない、あきらめて引き返そう』と思いながらも、午後2時、ついに頂上に立った。」と。登頂した3名はその日はC4に泊り、2日後BCに戻った。彼らの登頂から約1週間他隊員も2次登頂を試みたがC3に2名登ったのみで10月18日BCに集結した。

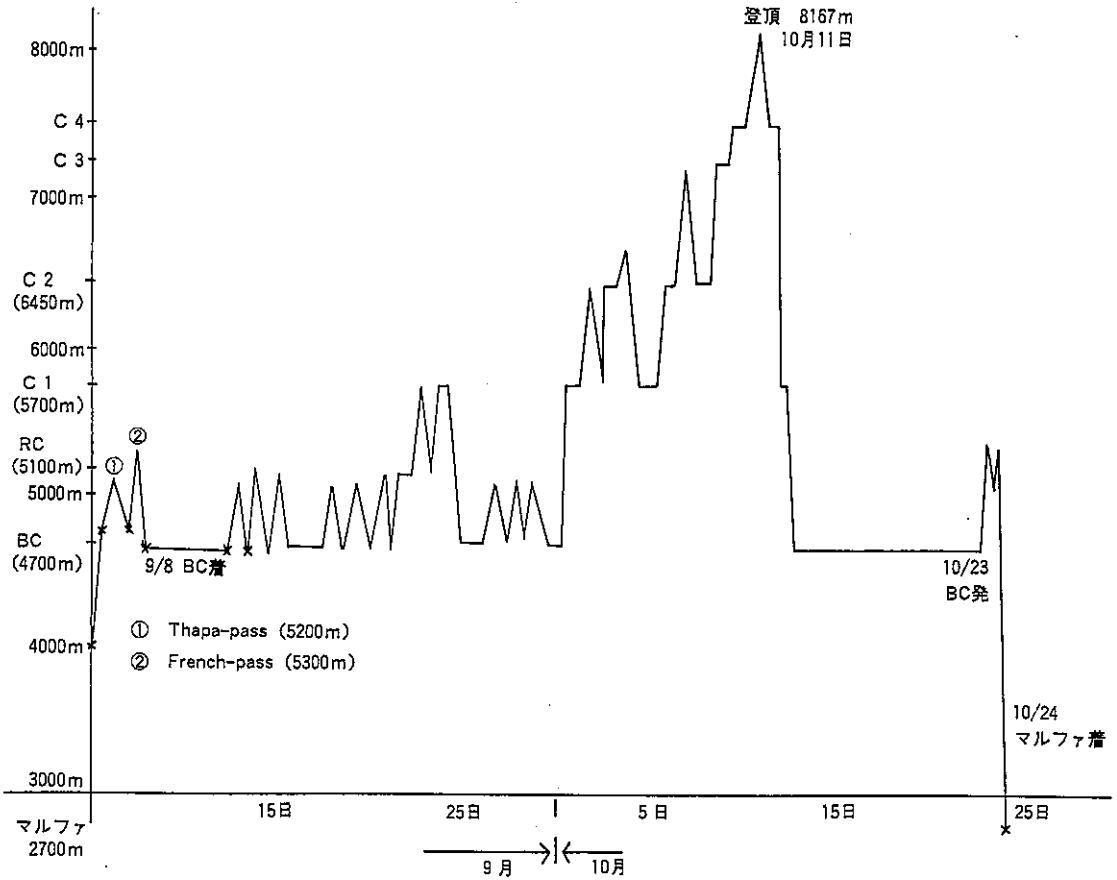
BCから頂上に到るまでのルートは前述の写真を基に作成した資料（資料4ーフレンチパスからみたルート）を御覧頂きたい。また登頂隊員の行動表も資料5に示してある。



資料-4 フレンチパスから見た登山ルート

この表をみてもわかる様に上部に出てから比較的短い期間のうちに頂上に達している。本来ならばC3からは一度BCへ戻り休養し、それから再度上部へというのがパターンであろう。初心者の我々ならなおさらのことである。しかし天候の都合などでセオリー通りにはいかなかった。たまたま（かどうか判らないけれど）登れたので万々歳であったが、もし事故でも起きていればあるいは非難の対象となったであろう。しかし、また逆の見方としてこの位の高所順応性、体力、気力がこれからの高所登山には要求されるかもしれない。事実この2名は他の隊員より、高所順応性、スピードにおいて相

1. 高所登山の実践と今後の課題



資料-5 登頂隊員の行動表

対的に勝っていた。かつての中島はガンガンとぼして登ったものであるが、今回は「小野寺さん、僕は最近抑えて登ることを覚えたんですよ」と言いながら、生活においても余分な力は使わず、登り方は余裕をもって登っていた。横山も抑え気味ながら強かった。登山者には色々なタイプがあり、恐らくペースがもっとゆっくりであれば登れたであろう隊員もいたかも知れないが、運がなかったと思う。

概略行動は以下の通りである。

- 9月13日；登山開始
- 9月20日；RC (5100m) 建設
- 9月22日；C 1 (5700m) 建設
- 9月29日；C 2 (6450m) 建設
- 10月 7日；C 3 (7300m) 建設
- 10月10日；C 4 (7500m) 建設
- 10月11日；頂上 (8167m) →C 4泊
- 10月18日；BC集結

1. 高所登山の実践と今後の課題

8. 帰 路

さすがに登山の疲れが出たためかポカラまではキャラバンでなくフライトにした。

10月23日；BC発→ヒドンバレー

10月24日；ヒドンバレー→マルファ

10月26日；マルファ→ジョムソン

10月27日；ジョムソン→ポカラ

10月28日；ポカラ→カトマンドゥ



写真-3 ジョムソン上部，カリ・ガンダキからのダウラギリI峰

9. おわりに

ふだん山行を共にしている仲間が単にヒマラヤに行きたいというだけで構成された隊であり、特に選択した訳ではない。従って本当に登って来れるかなという懸念もあったが、何とか登頂することが出来た。そしてそれ以上に全員無事で帰ってきて本当によかったと思っている。

出発前は筑波大学の浅野先生はじめ研究室の皆さん、テント調達に無理を聞いてくれたアライテント、装備や食料調達に力を貸してくれた都岳連の方々、現地と東京のFAXでお世話になったヒマラヤ協会の方々そして寄附をくれたOB等色々な人達に助けていただいた。そういった方々の親切が今回の結果として表れてきたのだと思う。

1. 高所登山の実践と今後の課題

この誌面をかりて深く御礼申し上げます。

そしてまた次の、より高みへとステップアップしていきたいと思っております。

隊員名簿

隊長	小野寺 齊	40
登攀隊長	市川 幸彦	44
隊員	中島 俊弥	26
"	大倉 栄一	42
"	松元 サチ	35
"	横山 浩二	24
"	米田 渉	21
"	鶴見 陽子	35
"	小沼 拓也	27

(ダウラギリ I 峰登山隊長)